小島信夫と Sherwood Anderson

—『抱擁家族』と“The Egg”他

渡　部　知　美

小島信夫は、エッセイ「成熟の問題など—『第三の新人』とアメリカ文学」において、Sherwood Anderson の短篇集 *The Triumph of the Egg* (1921) に収められている“The Egg”について、次のように述べている。

> それはともかくとして、「卵」におどろくのは、その異様なほどのコクというもので、これは私小説の系統のものでないと、出ないもので、日本の小説家が読んで共感をおぼえやすいものだ。ここで一つの要素になっているものは貧乏というものである。
>
> 『ワインズバーグ・オハイオ』にあるグロテスクなものに対する執着は、「卵」にもある。自由のきかない、とりつかれた色々な人間が挿話ふうに出てきて、一つの町を作り、世界を作っているという点で、『ワインズバーグ・オハイオ』は「卵」とはちがった面白味はあるが、鶏や卵と人間、家族のこの独特なところから浮かびあがってくる世界と較べると、平凡である。この小品がアメリカの家庭生活をも象徴しているのは、ふしぎである。
>
> (大橋,『アメリカ文学論集』404-5)

小島と Anderson は筆致は異なるが、[1] 平凡な日常生活に歪み、意外さ、驚くべきことを見つけ、そこに真実を探り当てようとしたという点では、通じ合う。Anderson の「グロテスク」なものに対する執着は、小島の「小不具者」への愛着を思わせる。「グロテスク」なるもの、「小不具者」は、近代西洋が排除していったものである。また、小島が“The Egg”に見出している「コク」は、彼の長篇小説『抱擁家族』(1960) にもある。

本論においては、『抱擁家族』と“The Egg”そして同じ短篇集に収められている“The Door of the Trap”を取り上げて、アメリカの物質文明の影響を考慮に入れながら、それらにおいて繰広げられる家庭生活について考察をする。

I

『抱擁家族』の背景は、小島によると、昭和30年代中頃から後半にかけての4、5年である（小島,「わが『鈍器』の意味」969)。「もはや『戦後』ではない」が、一神教的天皇制国家の崩壊とともに、絶対的価値基準の見出せない精神状況に、日本人は投げ出されたままである。反抗すべき堅固な「家」はない。復興による経済成長から、近代化と技術革新による経済成長へと転換を計った日本は、高度経済成長を誇る時代をひた走っている。産業構造の変貌、大都市への若年労働者の集中、企業の肥大化、個人の私生活の産業社会への組込みが進行していく。テレビ、冷蔵庫、洗濯機が「三種の神器」と呼ばれたのが昭和30年頃。「家つき、カーつき、ババー抜き」が中流以上の核家族を象徴するフレーズとして人々の口にのぼったのは30年代後半である（石原　310-11)。

小島信夫、安岡章太郎、島尾敏雄、遠藤周作という四人の「第三の新人」について、Van C. Gessel は次のように述べている。

> Signs of economic recovery and hopes for national rebuilding were just starting to mount when a new generation of writers, most of them bewildered survivors of the war experience, began to call into question the moral and cultural foundations of the structures that were being erected across the metaphorical landscape of Japan. The task of these authors could, then, be described as the work of dismantling. Irony is inherent in this labor, because as Japan as a nation is rebuilding in the wake of defeat, these writers are tearing down, attempting to expose a hollowness inside the new national structures. (Gessel 202)

復興し経済的繁栄を享受する一方で、種々の価値観がお互いを相対化し合い、道徳や文化という精神的な面にできた空洞は埋まらず、彼等は日本の土台にできたその空洞を暴こうとしたのだと Gessel は捉えている。

小島は本作品のテーマについて、「抱擁家族ノート」で、「神のない心の病気」と述べている。更に、第4章について、「この章の主題は時子は死んだことによってかえって生きるということである。なぜか。子供がいるからである。家が建っているからである」と述べている（遠丸　122)。小島がここで言っている「神」とは、宗教的信念のみならず、絶対的力を持って人の心を支配する倫理的判断基

準、文化的価値観をも意味すると考えられる。

大学の講師をしている三輪俊介の一家は、首都郊外に住む中流家庭という設定になっている。

> 三輪俊介はいつものように思った。家政婦のみちよが来るようになってからこの家は汚れはじめた、と。そして最近とくに汚れている、と。
>
> 家の中をほったらかしにして、台所へこもり、朝から茶をのみながら、話したり笑ったりばかりしている。応接間だって昨夜のままだ。清潔好きな妻の時子が、みちよを取締るのを、今日も忘れている。
>
> 自分の家の台所がこんなふうであってはならない。・・・（164）

本作品冒頭のこの文章は、俊介が既に、自分の家の問題に巻き込まれていることを暗示している。一家の主という意識を持っているが、彼が自分の家のことさえ手に負えないでいることも窺える。家政婦のみちよは、西洋の近代小説における悪を体現する人間、「ひとの人生をひっかけて、事故のごときバラバラへと解体して行く冷たい力」（千石　143）を思わせる。彼女のおしゃべりな口が、少なくとも俊介の頭の中に、時子がアメリカ軍基地の兵隊ジョージと姦通をしたという事実を形成するのである。

短篇「小銃」（1952）の主人公のように俊介は戦地で新婚の妻時子のことを思いながら、理想の妻像を膨らませていたのだと思われる。復員後は、彼は、時子は妻や母親という役割の中に自我を溶解させていると捉えている。従って、彼は時子の中に不可解な「他者」を感じたことはなかったのである。故に、今、俊介は、彼女の自我とセクシュアリティの主張に驚き、うろたえざるを得ない。「僕はお前はおれのものだ、といったのは、お前は大事な女だ、子供の母親だ、おれの妻だ、という意味なんだ」（174）という彼の言葉のポリティックスも、今は役立たない。彼は自分の目の前に、妻がひとりの性的他者として立ち現われるのを感じているのである。

> 「家庭」という空間の中に肉体の占める場をあきらかにしている、この厄介な、しかし理解すべき妻を「他者」と見た時、その見る度合いに応じて、この「他者」は、自己と同じ次元に無限にせり上がり、不透明の度を増してゆくのである。（饗庭　235）

自分の掌中にあると思っていた時子が、自分には把握できないという思いに、俊介は捉えられているのである。そして、彼女の首筋、組んだ脚に視線を向けた俊介は、妻が生身の女であることを感じ、「そこにひとりの女がいるということのまぶしさに圧倒され」(179) ている。彼は「自分の手を離れて独り立ちした人間の重さにおどろ」(180) かざるを得ない。

時子の恨みは、俊介が、夫であること、父親であることに「肩すかし」をくらわせ続けてきたことにある。アメリカ留学も妻の気持ちも聞かず、子供の教育のことを相談することもなく、彼はひとりで行くと決めてしまった。時子は、俊介は「大事なときに、ふいと眼をそらす」(208) と言っている。金を工面するのは俊介であるが、家の新築、改築を計画し実行してきたのは時子である。彼女は、ダンスを習い、車の免許を取り、顔に整形手術を度々施している。夫が留学するのを港の桟橋で見送るハレの日のために、頬に溝をつくっている深いしわを取ってもらっている。大柄な彼女は、デパートで男物のピンクのセーターを買って着ている。そしてやがて乳癌で入院する病室には、扇風機、テレビ、小型冷蔵庫を運び込ませる。郊外では、家の裏口、台所から通じる路地裏の文化もなく、各家庭が共同体から、互いから孤立している。専業主婦の時子は、消費活動で心を紛らわし、憂さを晴らしているのである。

Betty Friedan は、*The Feminine Mystique* (1963) において、1950年代後半から60年代初めにかけての、アメリカの都市郊外に住む主婦の抱える閉塞感を捉えている。本書において Friedan は、多くの主婦にとって、電気器具や洗剤等の新製品を買うことは科学にあずかることでもあり、彼女達は新製品の出現を楽しみにしていると述べている。また、「新製品を使うことは、主婦の地位を高めると同時に、主婦に贅沢をしているという気持ちをおこさせる」(157–8) と述べている。そして、多くの女性は、「世間のことに疎いが、家の外には広い世界があることを知っており、世界の進歩から取り残されはしないかと心配している」(161)。デパートの役割の一つは、「目まぐるしく変化している世界に、自分もあずかりたいという主婦の願いをかなえてやることである」(161) と述べている。

消費文化の誘惑は、それだけではない。時子は化粧、整形手術、男物の服で、自分のアイデンティティを作り上げたり、作り直すのに慣れている。消費文化の影響について、*Stephanie Coontz* は *The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap* (1992) において、次のように述べている。

消費文化は私たちが商品、感情、イメージ、人間関係すべてを「自由市場」から好みのままに選べるのだと主張する・・・私たちは物だけでなく人間同士の絆も選んで買えるもの、個人としてのアイデンティティや最も親密な関係すらすべて自分が選んで好きなように組み合わせることができると思い込み始めている。同時に幻想と現実、人と商品、イメージとアイデンティティ、自己とそれを取り巻くものとの境界線がぼやけ始めている。

・・・選択の自由があるということは常に良いことであり、選択肢は多ければ多いほど良いという考え方は、人間関係を非常に不安定にする。

(Coontz 262-63)

Coontzは、消費文化を、物質主義的個人主義を生み出す一つの要因として捉えている。家族との絆や社会的団結に背を向けさせる力を、消費文化は持っているのである。日本の倫理的空洞の中に押し寄せてくるアメリカの物質文明。家に出入りする青年ジョージに、時子が長い間ベッドで愛撫されるのを許していたのは、夢と現の間で、「アメリカ」に抱かれているという思いに酔っていたからだと考えられる。

俊介も時子も、ジョージが口にした「国家」と「責任」という言葉にはっとしている。公的ディスコースに使えるこういう概念や言葉に触れることがほとんどなかったからだと思われる。そして、そういう概念や言語自体経済的繁栄を享受する中で減っていったのだと考えられる。人間の責任、人との絆、モラルの問題を表現できなくなってきているのである。従って、ひとりひとりの倫理意識は更に希薄になっていく。

俊介との生活で、時子は、愛されているという思いを得ることも、愛することも十分にできない。俊介との結婚生活が自分の情緒的ニーズを満たしてくれるという期待感を彼女は持っていたと思われる。だから、今は裏切られたという思いを抱いていると考えられる。時子は自身の内面の希薄さに直面せざるを得ない。大金をはたいてまで新商品を手に入れることで、一時的な満足感は得られる。言わば代理の満足感を得ることで、彼女は自分の内面の空虚さに直面するのを先延ばししてきたのである。世の中に遅れてはいない、いつまでも若さは保てるというイルージョンは得られても、物で情緒的ニーズを満たすことはできない。「ムダなことしたり、ムダなことを話したりして、一日一日くれて行く」(198) という時子の言葉は、生の充足感の得られない自身の生に対する彼女の焦燥感を伝え

る。若ければ、別の男性と自分の人生をもう一度やり直したい、選択し直したいと彼女が思う理由は、ここにある。

妻を寝取られた男という立場自体が、悲喜劇性という相矛盾する性質を同時に孕んでいる。時子を責めようと思っても、「これから何をいい、何をしたらいいだろう。そういうことは、どの本にも書いてはなかったし、誰にも教わったことがない」(171) と途方にくれる俊介。逆に、時子に、「こんなことあんたは堪えなくっちゃ駄目よ。冷静にならなくっちゃ。あんたは喜劇と思うぐらいでなくっちゃ。外国の文学にくわしいんだもの」(192) と言われ、彼は「喜劇？なるほど、そうか」(192) と納得したかのような返事をしている。絶対的な倫理的判断基準を失った世界で、混乱している様が戯画的に表現されている。ふたりとも、「アメリカが代表する西洋的な自由の観念、特に合理主義的な感覚に基づく平等な男女関係の考え」(大橋,「『抱擁家族』について」277) を頭では受け入れている。1946年まで施行されていた明治刑法においては、妻の姦通は罰せられるが、夫の姦通は罰せられないとされていた。従って、時子は姦通を犯したとしても、男女平等を実践しただけよと思っていると考えられる。外国文学の翻訳をしている俊介も、頭ではそういう考え方を理解している。しかし、そう簡単に割り切れないことを、俊介の「不快」(279) 感が物語っている。大橋健三郎氏は次のように指摘している。

> そう考えるのが新しい合理的なことだと頭では互いに納得しても、心ではなかなかそうはできない。夫婦して合理と非合理のやりきれない境い目に落ちこんでゆく気配は、滑稽であると同時に深刻であり、近代の合理主義のもたらした相対感覚の極限が日本の家庭を根本から揺さぶっている・・・
>
> (大橋,「『抱擁家族』について」278)

倫理的、精神的支柱を失った日本を襲った近代合理主義とアメリカの物質文明。アメリカに、バラ色の夢、永遠の若さ、楽園、「獲得されるべき幸福」(江藤　64) を見たからこそ、[2] 日本の家庭に、それは押し寄せ、その土台から家庭を揺さぶっているのである。三輪家の、「カリフォルニアあたりの高原の別荘」(220) のような家、欠陥だらけのその建物は、正に揺さぶられている日本の家庭そのものを象徴している。[3]

II

物質文明がアメリカ社会を襲うのは、1920年代である。しかし、1908年には既に、フォード社のモデルTが世界最初の大衆車として発売されている。短篇“The Door of the Trap”の背景は、20世紀初め、機械によって大量生産された、規格化された商品で、外的な現実の世界が肥大化しつつある時代に設定されている。

植民地時代において、子供は一種の財産と見做されていて、財産のない男女は親権を主張する法的根拠に欠けていた。また、徒弟奉公の親方にも、若者の教育としつけについて、親と同じ責任と権利が与えられていた。親が子供を扶養する義務が、自然の義務ではなく、法的強制を伴うようになったのは、19世紀初期においてである。北部のミドルクラスの家庭を模範とし、子供時代は親によって保護されるべき期間であるという概念、そして、女性は家事に責任を持つべきであるという概念が法制化される。「正常な」家庭とは、プライバシーが保護されていて、経済的に自立している家庭であるという定義づけを、政府は打ち出している。これを達成できない家庭には、施設や政府が介入し、子供の親代わりになる権限を持っていた（Coontz 192–98）。

本短篇の大学の数学教師 Hugh Walker にとって、妻と三人の幼い子供は、自分の心に馴染まない存在として感じられている。教師生活、家庭生活が外的な現実の世界と意識され、自分の内面の世界と乖離しているのを、彼は感じている。

妻の Winifred を観察し、頭を整理しながら、Hugh は思索をしている：“Well, there is this woman, this person I married, she has the air of something accomplished”（120）。Winifred は、結婚をし、子供を産み、女として、人間としてやるべきことをやり、そのことは彼女の人間性として収まっていると Hugh は思っている。彼女は現実をありのままに受け入れ、それ以上のものを望んだり、変えようと思ってはいないのである。彼女が繰り返し読んでいる Robert Louis Stevenson の小説は、彼女にとっては単なる空想の世界の話でしかない。[4] そういうものを読んで楽しむ余裕が彼女にはあるのである。

一方、Hugh は、自分は生の意義が感じられるようなことを、何も成し遂げてはいないという思いに捉えられている。その思いが焦燥感となって募ると、第三者と調和してやっていけなくなるのである。彼が田舎を歩き回るのは、人がどういうふうに生きているのかを観察することで、“reality of life”（120）、即ち、生きるとはどういうことかという疑問に解答を得たいと思うからである。自分なり

の解釈が得られると、しばらくは落ち着いて生活できるのである。

Hugh 一家は、大学からの給料の範囲内で生活する必要はなく、家事、子守りをする黒人女が二人もいる経済的にゆとりのある家庭である。性別分業が進行していく社会にあって、Winifred は役割に縛られているという思いをしなくてすんでいる。彼女は、自分の分身である子供を通して、現実の世界につながっているという感覚を得ているのだと考えられる。一方、Hugh は、研究者、教師としての仕事を通しても、自分の子供を通してもそういう感覚を抱けないから、自分を、現実世界に根を持たない、物や商品の間を浮遊しているような存在と感じていると捉えられる。彼の焦燥感の根は、ここにある。そして、自分にとって妻子は“facts”(122) であり、彼らとともに生き、彼らに則って生きなければならないという彼の思いは、彼の人間性、家庭を成した自分の妻子への彼の誠実さを物語っている。

しかし、“facts”という表現が示しているように、Hugh にとって、彼の妻子は、外的な現実の世界の存在と意識されている。一方、同短篇集の一篇“Unlighted Lamps”の主人公でもある女子大生の Mary Cochran は、Hugh の内面の世界に入ってくる。Mary が背負っている影を、Hugh は感じるからである。[5] しかし、Hugh は、Mary を、これらから自分が関わりを持つ人間として位置づけてはいない：“He thought about Mary Cochran, the school girl, but was sure he thought about her in a quite impersonal way”(127)。言わば窓越しに“a young tree”(126) のような Mary を眺めることで、自分の人生にこびり着いた“facts”故に、息苦しさを感じている自分の内面を活性化するための刺激を与えてくれる人間として、彼は Mary を位置づけている。

Hugh の Mary に対するののしり、“What makes you want to read about life? What makes people want to think about life? Why don't they live? Why don't they leave books and thoughts and schools alone?”(129–30) は、自分自身に対するののしりでもある。Hugh は、自分が望む生活の具体像を持ってはいない。しかし、現在の生活において、自分は自分に嘘をついて、家族のために自分をだまして生きているという思いを彼は抱いているのである。従って、家庭生活は、彼にとって“prison”(128) なのである。

Hugh は、Mary の頬と唇にキスをして、彼女を自分の家庭から永遠に解放する。子供たちになつき Walker 家にいないとかえって奇妙に感じられる存在“fixture”(128) に Mary がなってしまったことに、Hugh は苛立ちを感じたの

である。彼女が彼の家庭に付着した存在、自分自身の人生を持てない存在になってしまうことは、彼女にとって残酷なことだからである。

> "She will be imprisoned but I will have nothing to do with it. She will never belong to me. My hands will never build a prison for her," he thought with grim pleasure. (133)

Hugh が感じている "grim pleasure" は、自分自身は家庭からの脱出口、人生の突破口が全く見出せないということに対して、彼が喜びを抱いているということを意味している。だが、Hugh の内面を引き付けた Mary が、彼女自身も彼に引かれて彼に近づくのであれば、Mary が彼にとっての脱出口になったのではないだろうか。しかし、Hugh にとって、それは人生における「罠の扉」なのである。Hugh が感じた喜びは、彼の夫として、父親としての義務感、倫理観を裏付ける。けれども、Hugh 夫婦には、夫婦は一皮むけば他人であるということが仄見える。故に、彼の脱出口が見出せない喜びは、陰鬱さ、自嘲的ニュアンスを帯びざるを得ないのである。

Ⅲ

19世紀後半、"From log cabin to White House" を体現した Abraham Lincoln 大統領や大実業家の自伝、伝記、Horatio Alger 流の小説が、人々を、世俗的成功の夢の実現へと駆り立てる。

しかし、一方では、産業界の規模拡張と生産増大が原因となって、経済的不平等、不安定が増大しつつある。社会階層の上層部を襲った投機熱は、大金持ちを一挙に増やす。労働者と農民の間には、貧困が広がっていく。一時的な失業状態が増え、子供の労働者が増えている。貧乏人は生存競争の落伍者というレッテルを貼られ、貧しいことは悪であるとされた。経済的不安定が大きくなるにつれ、中間層の人々も下位層へと転落する。経済的自立を達成できない移民や貧困層の家庭に対しては、軽蔑的、懲罰的態度がとられ、離散させる方が望ましいとされたのである（Coontz 158–61）。

アメリカ短篇史上の傑作 "The Egg" は、本短篇集のタイトルとも関連し、[6] 本短篇集を貫くテーマを考えるうえで重要なヒントを与えてくれる。"The Egg" においては、語り手が19世紀後半の中西部の田舎町 Bidwell で起きた自分の父親

の、人生における一つの敗北を語るという設定になっている。子供の頃、その場面、場面を目撃した語り手が、自分の想像力で場面ごとの間隙を埋めて語っている。従って、語り手が語る物語は、彼自身の感じ方、考え方、価値観、人生観が反映された物語、即ち、語り手自身の物語でもあると考えられる：“One in time gets to know many unexplainable things”(57)。

Anderson は、その敗北の原因となった卵というものを、人に希望、期待を抱かせ、それに一生懸命にさせた末に裏切り、それでも人が捨て切れないもの、そして、そのために人が相変わらずあくせくとしていくもの、言わば、人が諦め切れない、人生における一つの夢として、語り手に語らせている。ここには、敗北をしても続いていく生が暗示されている。Irving Howe は、この物語を“a parable of human defeat”(Howe 115) と解釈している。そして、Howe は、語り手の父親が自分の思う通りに扱おうとしてできず、結局、彼の手の中で卵が割れて中身が吹き出したことと、そのことが起こった後、母親が父親の禿頭を撫でていたこととを、“the two ultimate images in Anderson's parable of defeat”(Howe 116) であると述べている。人間の支配を脱して吹き出す卵の中身というイメージは、生の持つ力を、卵の殻の無機質性は、生の持つ非情性を暗示している。Howe は、「卵」が意味するものについて、次のように述べている。

> Traditionally, the egg arouses the most intimate associations with the processes of life, but in this story it is to be seen less as a symbol of creativity and renewal than as a token of all the energy in the universe —arbitrary, unmotivated, ridiculous, and malevolent—against which man must pit himself. (Howe 115)

「卵」とは、人間がそれに挫折しても執拗に持続していく生を暗示していると考えられる。

語り手の父親は手に卵を持って二階へ上がる。語り手は、父親がその卵を投げて壊すつもりだった、そうするのを母親と自分に見せるつもりだったと推察している。だが、彼女の前に来た時、彼は卵をテーブルの上にそっと置き、ベッドの傍に跪いて、彼女に頭を撫でられながら子供のように泣くのである。父親の心に何が起こったのか。翌朝、子供だった語り手は、テーブルの上の卵を見つめながら、なぜ、世のなかに卵というものが存在するのか考えている。

> I wondered why eggs had to be and why from the egg came the hen who again laid the egg. The question got into my blood. It has stayed there, I imagine, because I am the son of my father. At any rate, the problem remains unsolved in my mind. And that, I conclude, is but another evidence of the complete and final triumph of the egg—at least as far as my family is concerned. (63)

語り手は、卵を、自分たち一家に付纏うもの、言わば、宿命であると考えている。彼は、なぜ卵が存在するのかを一生疑問に思いつつ、生きていくと思われる。

一生懸命になればなるほど失敗をするということ自体、悲哀と滑稽という相矛盾する性質を孕んでいる。語り手は、男として、人間として自分の父親の「偉大さ」が分かるようになったのだと考えられる。父親が立身出世の夢に取り付かれるようになった、その火付け役をした母親について、語り手は、“For herself she wanted nothing. For father and myself she was incurably ambitious”（47）と語っている。父母ともに善良な人間である。しかし、善良な人間が働けども働けども貧乏のままなのである。語り手は父親が、Christopher Columbus は、卵を立てて見せると言ったのに殻を割って立てたから“cheat”（58）であると言ったと語っている。Columbus が発見して、ヨーロッパ人が楽園として夢見た新大陸アメリカ。語り手が発し続ける、なぜ卵が存在し続けるのかという自問は、何故、アメリカは真っ当な生き方をしている人間が夢を見ることのできない国になってしまったのかという、語り手と Anderson によるアメリカへの問いかけでもある。目的のためには手段を選ばない者のみの楽園に堕したアメリカ。語り手も父親も、挫折感に打ち拉がれても、不条理への問いかけを発しながら生きていく。家庭の温もりが彼らの精神的支えになっているのである。

James Schevill は、*The Triumph of the Egg* のテーマについて、次のように述べている。

> Through all the tales and poems in the book runs this idea, the continuity of life, life always renewing itself even though the dream of triumph must perish. (Schevill 161)

本短篇集の主題は、生の非常さ、執拗さに敗北させられても、生の営みを続けて

いく人間存在が持つ驚くべき力である。Anderson は、人間が置かれている情況がますます非情性を呈していくことを予測するが故に、逆説的表現をせざるを得なかったと考えられる。そのタイトルは、そういう人間が持つ力に対して、Anderson が覚える崇敬の念が込められている。このことは、形骸化した家庭を立て直そうと奮闘する俊介の姿を描いた小島にも指摘できると思われる。[7]

小島も Anderson も、「ちっぽけな、プライヴェートなものを見る以外に大げさなものを見る手がないというところから生ずる、おかしみと哀感と人間味」によって、「異様なほどのコク」を生み出している（大橋，『アメリカ文学論集』408）。また、家庭の中での孤独、そして更に家庭さえもはぎ取られた孤独な個人へと追いやられていく中で、『抱擁家族』においては習慣によって形成された夫婦関係が、“The Egg”においては逆境における血の意識、父子関係が濃い味わいを出している。

注

本稿における Anderson の作品からの引用は、*The Complete Works of Sherwood Anderson,* ed. Kichinosuke Ohashi（Kyoto: Rinsen Book Co.,1982）の*The Triumph of the Egg*（第Ⅸ巻）による。また、『抱擁家族』に関しては、『島・抱擁家族』（東京：新潮社，1981）による。ともに、本文中で括弧内で頁数のみを示す。

1　Anderson の文章は、心理主義リアリズムと言われている。一方、小島の文章に関して、平野謙氏は、「観念的なリアリズム」であると指摘している（平野　76）。

2　俊介がアメリカ式の新居に見る夢、贅肉のない若い時子と自分が、プールで泳いで戯れ、芝生の上で抱擁しながら倒れるという夢は、日本人がアメリカに見た夢、アメリカ文化が象徴する幸福への憧憬の一面を表現していると考えられる。

3　Van C. Gessel は、この新築の家の隠喩としての重要性を次のように指摘している。

“Kojima here uses architectural metaphors to call our attention to the contravening acts of building and demolishing that typify both the nation and his characters. The novel centers around a physical structure—a house belong-

ing to his protagonists, the Miwa family. In fact, the house often seems more like the main character in the novel, taking over the position of central power vacated by the husband, Shunsuke.”（Gessel 204–6）

4　Robert Louis Stevenson は、*Treasure Island*（1883）、*The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde*（1886）等の作者である。これらは、一般に、少年・青年時代に読まれる作品と思われる。

5　Mary Cochran の母親は、Mary が幼い頃に家を出ている。それ以来、父親と二人きりで暮らしてきたのだが、互いに互いへの愛情表現が素直にできなくて壁を感じている。その壁を突き破ろうと二人とも決意した矢先に、父親は亡くなってしまう。Mary は、自分の母親の出奔についての世間の噂に心を傷めているが、その真の理由を知らされないままである。Mary は、Hugh 一家の子供たちと過ごすことに、心慰められるものを見出すのである。

6　“The Egg”という本短篇集に収められている物語は、‘The Triumph of the Egg’というタイトルで、雑誌 *Dial* の1920年３月号に載っている。本短篇集のタイトルを‘The Triumph of the Egg’と決めたのは、Anderson の書簡から推察して、遅くとも翌年３月である（Jones 54，71）。その物語のタイトルを現在のものに決めたのは、全体のタイトルを決めたのと同時期か、あるいは、その後ではないかと思われる。こういう経緯からも、“The Egg”は、本短篇集の主題を考えるうえで大変重要であると思われる。

7　小島信夫は、エッセイ「僕は恥じる」において、次のように語っている。

「終戦後、ひところ、だれかれとなく、『暗い』とか、『重い』とか、『影』とか、『・・・の下に』とか『暗いはしごだん』とかという題名を使ったことがある。・・・暗いとか明るいとかいう、明暗の度でもなく、虚しいなどという、感覚的に拱手したものでもなく、とにかく米を背負って歩かねばならず、生きねばならず、どうして暗い虚しいどころではなく、いさましいものであった。・・・地球に生きていず、地球の外から、眺めているときにだけ、虚しい、暗いと思うのであろう。」（小島，「僕は恥じる」386）

小島が人々の日常生活にもぐり込んで、同じ視線の高さで、人の生の営みを捉えて描く理由を、ここに見出すことができる。

Works Cited

Anderson, Sherwood. *The Triumph of the Egg. The Complete Works of Sherwood*

Anderson. Vol. Ⅸ.

Gessel, Van C. “The Voice of the Doppelgänger.” *Japan Quarterly.* 38.2.(April-June 1991): 198-213.

Howe, Irving. “The Short Stories.” *Sherwood Anderson: A Collection of Critical Essays.* Ed. Walter B. Rideout. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1974.

Jones, Howard Mumford, and Walter B. Rideout, eds. *Letters of Sherwood Anderson.* Boston: Little, Brown and Company, 1969.

Schevill, James. *Sherwood Anderson: His Life and Work.* Denver, Col.: U of Denver P, 1951.

Coonz, Stephanie. *The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap.* Basic Books, 1992.『家族という神話』岡村ひとみ訳　東京：筑摩書房，1998.

Friedan, Betty. *The Feminine Mystique.* New York: Curtis Brown Ltd., 1963.『新しい女性の創造』三浦冨美子訳　東京：大和書房，2004.

饗庭孝男　「跛行の文学—小島信夫論」『文学界』26（12），1972.

石原千秋　『テクストはまちがわない—小説と読者の仕事』　東京：筑摩書房，2004.

江藤淳　『成熟と喪失—母の崩壊』　東京：講談社，1993.

大橋健三郎　『アメリカ文学論集—人間と世界』　東京：南雲堂，1971.

————　「『抱擁家族』について—笑劇による悲劇」『抱擁家族』　東京：講談社，1988.

小島信夫　「僕は恥じる」『現代日本文学体系』90　東京：筑摩書房，1972.

————　『島・抱擁家族』（新潮現代文学　37）　東京：新潮社，1981.

————　「小銃」『日本短篇文学全集』47　東京：筑摩書房，1969.

————　「わが『鈍器』の意味」『昭和文学全集』21　東京：小学館，1987.

千石英世　「最後の性—『抱擁家族』における神の問題」『小島信夫をめぐる現在』大橋健三郎他編　東京：福武書店，1985.

遠丸立　「小島信夫文学論集」『国文学—鑑賞と解釈』　東京：至文堂，1972.

平野謙　「軽石のまわりである顔—小島信夫氏の文体」『文学界』10（8）1956.